希望へ向かって 職場の年男

合理化許すな「人間をかえせ」

一分会　野田忠義

まさに虚構の時代と言えようか。

現代社会の矛盾は次の矛盾を生み、拡大し、とどまることをしらない。搾取、収奪され続けた労働者の犠牲の上に、つくり出された物と金は、さらに人間社会をゆがめ、人間を片隅に押し込めていく。人を人として認めようとしない、もの言わぬロボットをつくっていく。

虚構の中の実像と言えよう。

もう戦争はしまいと誓ったはずの日本人が、アメリカと合同で殺しの練習をしている。天文学的数字の価格をもつ土地の上で、ささやかな賃金を得るために働く労働者。国会議員の元総理大臣が犯罪をおかし、その子分が子供たちに教育を語っている。

これでよいのだろうか。

国鉄の民営分割で仕事を奪い、事業団というオリの中に押し込んで無理やり人間の働き方、生き方を変えてしまおうとする攻撃にみられるように、全国どこの職場でもなりふりかまわぬ合理化を進めているのが実態である。

われわれ炭鉱労働者も、戦後経済復興の中心的エネルギーを生産するために、過酷な労働環境と労働条件で働かされ続け、いま経済合理性の名のもとで、数多くの犠牲者の無念のうめきを地底に残したまま、地表に野ざらしにされようとしている。もうこれ以上はがまんはできない。がまんしてねじれた自分を取り戻そう。「人間をかえせ」と叫んでいこう。仲間の信頼を取り戻し、手を取り合って、一歩前に出る勇気を出し、励まし合っていこう。

男の涙にこたえる運動を

一分会　立山義人

今年の年男に一言とのことですが、昨年を振り返ると、いろいろなことがありました。採炭切羽の縮小と、それにともなう希望退職という名の人員整理。砂川鉱の閉山、四山、大島社宅の退去提案。わずか九十円の賃上げ。高島鉱の閉山から一年、円高、全民労協から「連合」へ、etc。

私事では娘の高校入試と、作業足場より落ちて負傷休業など。一番頭に残っているのは人員整理と高島の閉山後一年のテレビ特集です。

私と同じ年代の仲間が職業訓練の途中で家族と別れ、名古屋の地下鉄工事現場へ単身就職の場面です。大の男が涙を流す現実を目にした時、自分自身と対比して何ともいえない気持になりました。

円高で日本は金持ちといわれ、また、事実アメリカのビルディングが日本の大企業によって買い取られたり、諸外国に日本の企業が大量に進出したりしていますが、その反面、日本の労働者は低賃金に苦しみ、合理化によって首を切られ、一家離散や失業が強いられています。

また、定年になっていざ厚生年金で生活を、といっても昨年の年金の改悪で月に数万円も少なくなったと聞きますし、さらに年金の改悪がチラホラ出ているようです。

いま、高島鉱閉山にみる〝男の涙〟をどう考え、今後の労働運動にどう生かすかが私たち組織労働者の課題だと思います。私も組織の一員として皆さんとともに頑張ろうと思っています。

春闘、諸要求の闘いこそ重要

一分会　岩下幸男

昨年がきびしい年であっただけに、新しい年を迎えて、今年こそはと願わずにはいられません。

昨年は、第八次石炭政策の名による大合理化が荒れ狂った一年でした。

一月半ばから三月末にかけての土曜日の一時帰休。六月、七月にかけての希望退職、鉱間配転によって約四百五十人ぐらいの人達が四山鉱の職場から去りました。

十月には二鉱体制となり、新年早々から、四山鉱、三川鉱の坑口が統合されます。また、昨年の労働条件は、春闘も延期された末に、賃上げや夏・冬の期末手当も超低額におさえこまれました。

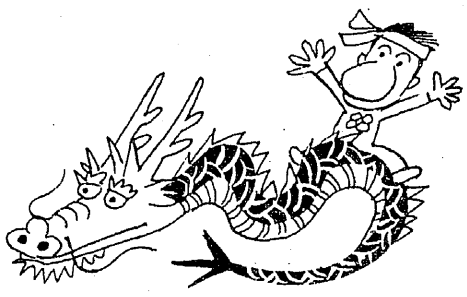
全国的には、三井砂川鉱の閉山をはじめ、各山にも大合理化が強行されています。

いま職場では坑口統合によって起こる不安がいろいろと取りざたされていますが、「駐車場は？」「脱衣場がロッカーでは、きゅう屈ではないか？」「入坑から現場まで一時間もかかるのでは、始業時や終業時はばたばたで、忙しくなるのではないか？」などです。

会社の計画では、人当たり能率を百五十トンに引き上げて三百五十万トン体制にするために、今後もなお一層の合理化強行が予想されます。

一方、労働戦線の右翼的再編が進められ、昨年十一月には全民労協が結成され、来年末までには総評の解体が日程にのぼっているなかで、今年の春闘や労働者の諸要求をかかげるたたかいは一層重要な意義があると思います。

石炭産業をめぐる情勢はきびしいものがありますが、今年こそは炭鉱労働者の生活と権利を守り、生命を守るたたかいを、さらに進めなくてはならないと考えているところです。



保安に妥協なし

労働部長　森皐

昨年一年間の三池炭鉱の保安状況は、災害率三五%、死亡災害ゼロをクリアしそうで、昭和五十九年の有明鉱災害以降「統計的」保安実績はよい方向で推移している。

しかし、三池炭鉱の「保安が良くなった」と考えるのは早計であろう。要は、この実績を保てるだけの保安体制が確立しているかどうかである。

三池労組は、長年「保安優先」「人命尊重」のたたかいを進めてきた。大災害、死亡災害が繰り返しひき起こされ、生産第一主義、利潤追求優先の合理化に踏みにじられ、多くの労働者の命が奪われてきたからである。企業の合理化が、労働者に対して保安無視、労働強化の犠牲強要であったことは歴史が事実をもって証明している。

いま、第八次石炭政策をめぐる動向によって、国内炭の位置づけが一変し、国内炭鉱が存続できるかどうかというような厳しい情勢がある。仮りに、大きな災害でも起これば、八次策のシナリオさえも狂わしかねず、優良炭鉱であっても終えんを迎えることになる。

会社は「生産と保安は車の両輪」だと公言するが、これは文言として不十分である。内外の経済情勢しだいでは、生産が保安をおさえる危険性をもっているからである。全国的な各石炭産業の保安成績が良いのは、保安体制や対策とは無関係に国内炭の需要減、貯炭増による生産縮小があったことを無視できないのではないか。

二鉱体制となった新しい年の保安上の課題は多い。

その第一は、国内での最優良炭鉱をめざして、個人能率五〇%の上昇をめぐる動向である。労働者にとっては、とてつもなく大きな目標を背負わされるわけで、労働強化、災害増加の危険性をはらんでいることを指摘しなければならない。

第二に、保安部教育のシステムである。会社は「負傷減のメリットがある」と言うが、六十年、六十一年とも三百人以上、六十二年、百五十人以上（労働不能による日数は不明）が労働災害によって負傷し、統計上では労災取り扱いをされず、保安上の対策もたてられていないのが現実である。

入院しなければならないような負傷者以外は、負傷者ではないというような体制で、頻発災害ゼロに挑戦できるのだろうか。

小さな災害の積み重ねが、死亡災害、重大災害の要因になることは明らかであり、小さな災害（頻発災害）に歯止めをかける具体的な保安対策と体制こそが、いま重視されなければならない。

「保安と生産は車の両輪」では不十分である。石炭産業存続の大前提が保安であることを明確にさせなければならない時である。

そのために「保安に妥協なし」の立場を、三池炭鉱で働く全労働者のものにする決意で保安確保のたたかいに取り組もう。

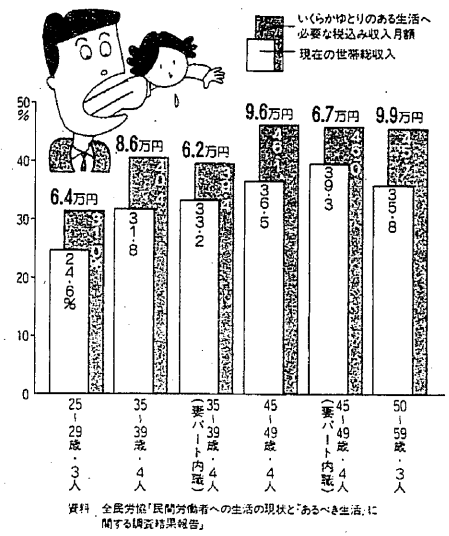
88春闘グラフ解説 ①

ゆとりの生活あと九万円

ことしの春闘では「ゆとりある生活へ質的向上」が重視されています。そのためには、所得の向上や住環境の改善など社会資本の充実がもとめられます。

所得向上の面からみると、全民労協調査では「あと六～九万円」の要望が出されています。「ゆとりのある生活」をめざし春闘を精一杯たたかいましょう。

◉ゆとりある生活へあと6～9万円



資料　全民労協「民間労働者への生活の現状と『あるべき生活』に関する調査結果報告」

賃上げ要求基準七%以上

春闘討論集会　総評が方針案示す

総評は十二月八、九の両日、静岡県熱海市で開いた春闘討論集会で、来春闘の賃金要求基準を七%以上（定昇別）とする案を提起した。

春闘方針案の説明に立った真柄栄吉事務局長は「七%以上」とした根拠について、「五%程度の経済成長を持続的に行うためには国民所得はこれを上回る上昇が必要であり、同時に物価上昇による生活維持は当然。その意味で昨年の要求（六%以上）を下回る理由はない」と述べた。

制度・政策要求の取り組みとしては、税制改革のたたかい、国民健康保険制度改悪反対の取り組み、土地基本法の制定などを提起している。

討論では、「要求水準について認識は一致している。昨年を下回る必要はない」「八八春闘は欧米並みの生活水準をめざす重要な節目。賃金だけでなく、物価、税制、土地問題など幅広く取り組む」（情報通信労連）「八八春闘は『連合』を中心にまわっていくだろうが、総評の役割と任務を強化し、民間代表の『連合』と連携をはかりつつ、生活主導型の成長を達成できるよう指導性を発揮してほしい」（全逓）など、幹事会提案の方針案をほぼ認める発言のほか、円高差益還元などについて注文や苦言が出された。